

[課題演習概要]

主体的な学びに培う小学校国語科の授業研究  
—子どもが選択する学習環境の整備—

田 崎 陽 向  
Hinata TASAKI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース  
初等教科教育高度実践力プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：主体的な学び 小学校国語科 学習環境 学習の手びき

1 研究の目的

現行の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を通して、子ども達の「生きる力」を育むことを目標としている。この目標に向け「何を学ぶのか(コンテンツベース)」から「何ができるようになるのか(コンピテンシーベース)」,「どのように学ぶのか」が重要視されるようになった。

OECD もまた,「OECD Future of Education and Skills 2030」(教育とスキルの未来: Education 2030【仮訳(案)】秋田他 2018)において「私たちの社会を変革し,私たちの未来を作り上げていくためのコンピテンシー」として,「新しい価値を創造する力」,「対立やジレンマを克服する力」,「責任ある行動をとる力」の3つを挙げており,その実現が求められる。

そこで,本研究では子ども自身が必要と考える学習を選択できる学習環境の整備を目的とし,その具体として大村はまの「学習の手びき」を参考に学びの補助となるツールを作成する。本研究の詳細は,論文「主体的な学びに培う小学校国語科の授業研究」(田崎 2023)を参照されたい。

2 研究の計画

本研究は次の4つの段階を設定し進めた。

I	実習校の子ども達の実態把握を行い,子ども達のつまづきそうなポイントを抑える。
II	子ども達の実態から「書くこと」に関する「学習の手びき」を作成し,実践する。(実践①)
III	IIの結果の分析・考察を行うとともに,再度子ども達の実態把握を行い,「話すこと」に関する「学習の手びき」を作成する。
IV	新しく作成した「学習の手びき」を用いて授業実践を行い,結果を分析・考察する。(実践②)

3 研究の内容

(1) 先行研究(「学習の手びき」)について

「学習の手びき」(以後「手びき」と表記)は,個に応じるものであり,子どもが自身の学びを自ら形成するための1つのツールである。先行研究では,以下の5つの要素が見出されている(若木 2016)が,中でも子ども達の内面を引き出したり学習の仕方を示したりするものが多い。こうした「手びき」を活用することは,その個独自の学びの形成と,学び方の習得を意図する。

A	単元全体等の学習の進め方
B	学習活動や作業の指示
C	読むため考えるため等の着眼点
D	話し合いや書き方等の仕方
E	言語的知識を含む主として国語に関する知識

このことから「手びき」は現行の学習指導要領の「何ができるようになるのか」,「どのように学ぶのか」やOECDの掲げるコンピテンシーのうち,自身の学びに責任をもつこと,すなわち,「責任ある行動をとる力」を育むために適した学習支援ツールと考えることができる。

これらを踏まえ,本研究ではCとDに焦点を当て,「手びき」を作成し研究では2つの実践(実践①と②)を行った。本稿では,実践①と②のうち,Dに焦点化した実践②を取り上げ,「手びき」の効果と課題を整理する。

(2) 授業実践(実践②)について

実践②では話し合いをテーマとし,話し合いまでに必要な学習,実際の話し合いの中で,子ども達が「知りたい」「分からないこと」を解消することを目的とし「手びき」を作成した。また,実践

①での課題である「手びき」使用の際、自身のニーズと対応する「手びき」のページが分かりづらい」という点を意識して行った。本稿では実践①で用いた「手びき」を「手びき①」とし、実践②で用いた「手びき」を「手びき②」とする。

### 【資料1】授業実践概要

単 元 名	はんで意見をまとめよう
対 象	A市立B小学校 第3学年 1組 (31名)
詳 細	<p>○1時間目 話し合いを行い、自分達の話し合いの課題点に気付く活動。</p> <p>○2時間目 前時に行った自分達の話し合いと教科書のモデルの話し合いを比較し、相違点や工夫点に気付く活動。</p> <p>○3時間目 話し合いの「目的」と「決めること」を考える活動。</p> <p>○4時間目 「学習の手びき②」を用いながら、話し合いに必要な係とその仕事内容について調べる活動。</p> <p>○5時間目 話し合い全体の流れを確認した後、意見の比較・分類を練習する活動。</p> <p>○6時間目 ①話し合いで「決めること」に対する各自の意見を考える活動。 ②話し合い活動。この際、子ども達は配布してある「学習の手びき②」を用いて係の仕事や意見のまとめ方等のわからないことを調べる事が可能。 ③友達の話合いの様子から、いい所や工夫点を記述する活動。</p>

#### (3)作成した「学習の手びき」について

作成において留意したのは次の3点である。

- ・子ども達の実態に留意し、つまずきそうなポイントを取り入れること
- ・「手びき」に目次を作成したこと
- ・親近感を持たせること、実際場面で共有したイメージを持たせること

#### (4)「学習の手びき」を用いることの成果と課題

「手びき」は、子どもが自ら必要と考える学習を選択できるような学習環境の整備を目的とし、作成した。子どもの活用実態や自由記述から「手びき」に対し捉えた成果と課題は次のものである。

成果は、多くの子どもが、必要を感じて「手びき」を使用した実態が見て取れたことである。これは、「手びき」が学習の選択とサポートに機能したことを示す。ただし、課題としては、「手びき」を作成するうえで対象とした子どもや「この子にはぜひ使ってほしい」と思っていた子どもの多くが「手びき②」を使用していなかったことである。

## 4 成果と課題

上記を踏まえ、本研究の成果と課題を以下に整理する。

まず成果である。成果については「子ども達が自身の学習を選択するということに慣れてきた点」だ。実践①で使用した「手びき①」と実践②で使用した「手びき②」の活用状況を比較した際、「手びき②」の方が使用されたページに偏りが少なかったことからそうように考察した。これは「手びき

②」の方が「手びき①」と比較して情報が多かったという要素もあるが、2回の「手びき」を使用した実践で子ども達が、選択することに慣れてきたためではないかと考えた。

一方、課題については、「手びき」を使いこなしている子と使いこなせていない子の差が激しい点が挙げられる。これは情報量が要因ではないかと考察する。成果でも述べたように、実践②で使用した「手びき②」は、実践①で使用した「手びき①」と比べて情報量が多くなっていた。「手びき①」が6ページであるのに対し、「手びき②」は18ページ）このことから、普段から読み物資料から必要な情報を探し出すことが得意な子どもや、2回の実践から自身で選択することに慣れてきた子どもは、より多くの情報から自身の求める情報を探し出すために、必然的に「手びき」を使いこなす結果となったのではないかと考える。他方で、情報を探し出すことが苦手な子どもやまだ選択することに慣れていない子どもにとっては、多くの情報を前にどのように選択したらいいのかかわからない、あるいはそもそも読む気が失せてしまったのではないかと考える。

以上のことから、子どもが自ら必要と考える学習を選択できるような学習環境の整備するために今後、「手びき」を作成・使用する際は、いくつかの種類の「手びき」をあらかじめ用意する必要がある。今回は全員に同じ「手びき」を配布した。しかし、それでは情報が多すぎた、あるいは少なすぎたということもあるかもしれない。そのため、情報量やその内容をできる限り個別化し、最適な「手びき」を準備することでより子ども達の選択の幅が広がるとともに、自身の学習を選択しやすくなるのではないかと考える。

### 主な引用・参考文献

- 秋田喜代美 他 2018 教育とスキルの未来：Education 2030【仮訳(案)】 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室  
[https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf) (最終確認 2023/01/29)
- 文部科学省 2017 小学校学習指導要領(平成29年告示)
- 若木常佳・北川尊士・稲田八穂 2013 話し合う力を育成する教材の研究 「台本型手びき」にキャラクターを設定した場合 福岡教育大学紀要第62号 87-95
- 若木常佳 2016 大村はまの「学習の手びき」についての研究—授業における個性化と個別化の実現— 風間書房 195